

れる。一方H-6・7・9号住居跡は寺域でありながら国分尼寺の存在する時期と重なる。ここに国分尼寺と関わりのある人々の生活空間が存在したことも考えられる。またH-3号住居跡は11世紀前半と考えられ、国分尼寺の廃絶期を示すものと言えよう。また調査区西側X61付近で南北に走るW-1号溝跡と尼寺との関係も含めて、南門南側の空間について今後さらに調査していく必要があろう。

今回の調査では今後の調査へ向けたいくつかの課題が出てきた。しかし国分尼寺南面を広い範囲で調査を行っていく必要性を改めて痛感した。

3 壺Gについて

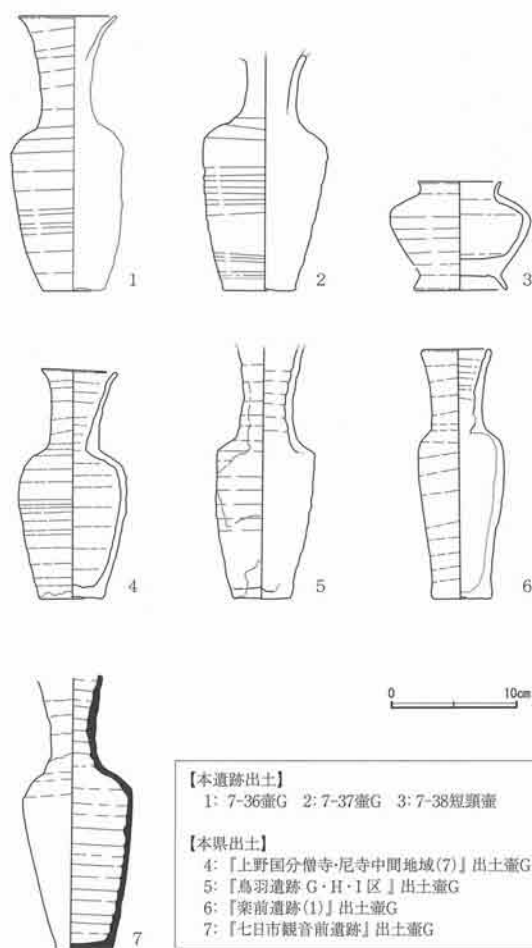
「壺G」とは国立奈良文化財研究所による平城宮土器分類における長頸壺の呼称である。分類では、各器種をアルファベット順に呼称する。須恵器壺のうち、胴部が細く、口縁がラッパ状に開く長頸壺について「須恵器壺G」と呼称している。ここでは、平城宮土器分類での「壺G」という呼称を使用する。

今回、国分尼寺南面の7区D-3号土坑から「須恵器壺G（以下壺G）」と「小型短頸壺の薬壺（以下薬壺）」が共伴して出土した。

なお、観察を行うに当たって、群馬県埋蔵文化財調査事業団の神谷佳明氏、高島英之氏、谷藤保彦氏にご指導いただいた。

(1) 壺G

さて、壺Gの製作された時期としては長岡京の前後、8世紀中葉の後期～9世紀第1四半期に分類される（註



壺G図① 本遺跡および本県出土の壺G

4)。本県でも本遺跡近隣の『上野国分僧寺・尼寺中間地域』や『鳥羽遺跡』、太田市の『楽前遺跡』、富岡市の『七日市観音前遺跡』などである程度残存状態のよい形で出土している（註5）。また、破片のみの出土は多くの報告がある。使用用途については、仏具として祭祀に用いたとされる花瓶説と、水筒などに利用されたとされる水瓶説がある。

では、本遺跡から出土した壺G 2個体、薬壺 1個体を詳しく観察していきたい。記述に当たっては、Tab.6 土器観察表における呼称に従う。

7-36壺G（壺G図①1）の胎土は明褐灰色を呈し、白色の軽石と砂礫を含む。右回転で粘土紐を積み上げ、轆轤整形で製作されている。底部より肩部に向けてやや広がる円筒形の胴部を呈し、肩部は屈曲して頸部に移行する。頸部は細長い長頸で口縁部は外反して大きく開く。口縁・頸部は胴部を製作した後に接合されており、胴部と頸部の境目には接合痕が残っている。肩部と胴部は回転斲削りの調整を施している。底部は静止糸切りである。

7-37壺G（壺G図①2）の形状、製作技法は7-36壺Gとほぼ同じ。異なった部分としては、胎土は灰黄色を呈し、7-36壺Gに比べてやや硬質な印象を受

けること、肩部の回転窠削りの痕が鮮明に残っていること、底部を回転糸切り後、外周部分のみ撫でて調整していることなどが挙げられる。また、口縁部が破損している。

(2) 薬壺

7-38薬壺（壺G図①3）の胎土は褐灰色を呈し、黒色の粒子を含み、本項で扱っている三つの須恵器の中では群を抜いて硬質である。轆轤整形で作られている。底部は回転糸切り後、付け高台で接合部分を撫で調整。高台はハの字に広がっている。底部から肩部に向かって広がる。肩部に器最大径を有し、屈曲部に回転窠削りを施している。頸部はつまみ上げによる小さなもので口唇部に向かってやや外反している。口縁と肩部に自然釉が付着している。

(3) まとめー生産時期とその用途



壺G図② 道明寺十一面観音菩薩立像
水野 敬三郎編『カラー版日本仏像史』2001年より

今回出土した壺G 2個体、薬壺1個体の製作時期については、肩部が張り出す器形であることや、国分寺創建期と考えられる軒瓦などが同じ土坑から出土しているため、8世紀後半と考えられる。壺G 2個体ともに作りが粗いことや、胎土の特長から本県の藤岡で生産された可能性がある。薬壺は胎土が硬質であることや、黒い粒子を含むことから東海地方で生産され、本遺跡の地域に持ち込まれた可能性がある（註6）。

次に壺Gの使用用途であるが、国分尼寺南面から出土したこと、祭祀的な用途で用いられる薬壺と共伴であったこと、口縁部が外反し肩部が張り出す器形で大坂・道明寺十一面観音菩薩立像（壺G図②）などの観音菩薩が持つ花瓶のモチーフに酷似しているなどの理由から、祭祀的な目的で使用されたものと考ええる。

以上のような事柄から、本遺跡で出土した壺Gと薬壺は、国分尼寺に関連して祭祀的な目的で使用された後に、まとめて国分尼寺南面の土坑に破棄されたものと考えられる。